No. 353 (1/3)

ISSN 0915-0560

MACRO REVIEW

日本マクロエンジニアリング学会誌

Vol.15 No.1 2002

JAPAN MACRO-ENGINEERS SOCIETY

2002.9.1 発行

MACRO REVIEW,Vol.15,No.1,35-36,2002

<追　悼>

持田 豊さんを偲ぶ

平林英一（正会員）

持田さんが亡くなられた。去る5月14日、午前4時、肝硬変による由である。享年73歳。あの頑健そのものの方が、と思うが、今はただご冥福をお祈りするばかりである。

持田さんには、当日本マクロエンジニアリング学会の会長職を1995年4月から1999年3月まで2期4年にわたって務めていただいた。僅か3年前までのことなのだ。

持田さんが当学会に入会されたのは何時なのか、精確な記録も記憶もないが、1985年4月に当学会が発足して、翌86年2月に第1回研究大会が大手町にあった住友金属工業(株)の大会議室で開かれたとき、そこに出席されていた記憶がある。創立のメンバーではないが、ごく初期の会員である。

持田さんに私がはじめてお会いしたのはその数ヶ月前のことであった。その頃、私は日本興行銀行にあって、英仏海峡トンネルプロジェクトに融資する国際銀行団の中でなんとか然るべき幹事の地位を確保しようとやきもきしていた。私の考えた案は、従来の日本の銀行のようにお金を黙って出すだけでなく技術面からもこの大プロジェクトをチェックする役割を担おうというもので、その具体的な手が、青函トンネルを掘りあげた持田さんの英仏海峡トンネル技術顧問への就任であった。持田さんは日本鉄道建設公団本社海峡線部長として1983年1月に青函トンネルを開通させた後、84年6月からサンコーコンサルタント（株）に移り、85年6月から同社の代表取締役常務というのが当時の役職であったが、青函を完成させた人ということで、石森章太郎の「マンガ青函」の主人公にもなった有名人であった。マンガでは下宿先のお嬢さんから慕われるという話になっていて私が「これ本当ですか」と聞いたら持田さんが「へへへ…」と苦笑された顔は今でも思い出せる。

英仏海峡トンネルプロジェクトは、1984年11月のサッチャー・ミッテラン合意にはじまり、1985年にプロジェクト企画書の公募があった。このプロジェクトは政府資金の援助が一切なく、企画段階から民間資金の調達についての確かさを示す必要、逆に言えば、そうしなければつまり銀行団が融資を約束するなんらかの形を示さないと落札できない情勢であった。だからどうしてもここで持田さんを担いでがんばっておく必要があった。幸い1986年1月に私たちのグループの案が採択され、興銀は技術担当幹事ということになり、約束した範囲内でお金をわたす前に工事進捗状況等をチェックする係りとなった。とはいうものの実はすべて持田さん頼りであった。そんな頃にマクロエンジニアリング学会にお誘いし、当時の中川会長から「こういう方にお入りいただけるのは」と喜んでいただいたのを覚えている。

うち明けていえば、持田さんが英仏海峡トンネルにかかわった最初の段階はこのようなかたちであったから、いわば間接のまた間接といったくらいで隔靴掻痒の感であった。だがその後、英仏側が青函の見学に来、持田さんが先方を訪れて話を重ねていく間に、次第にその実力、人柄が認められて、とうとう先方の実施主体であるユーロトンネル社からも欠かせない相談相手となったのである。持田さんの実力である。最後はどのくらい信頼されるにいたったかは、持田さんの書かれた「青函トンネルから英仏海峡トンネルへ」（中公新書 1994年8月）に掲載されている、1994年2月ユーロトンネル完成式での持田さん、サッチャー前英首相、ユーロトンネル社社長モートン氏の3人

いっしょの写真から十分に伺うことができる。この写真をみると持田さんはゆとりを持ち実に堂々としている。ほんとうになつかしい持田さんがここにいる。この後当学会の会長になられたのである。

青函は持田さんが選手・主将で、英仏海峡では持田さんは審判役のようなものであった。とはいえ、まぎれも無く、持田さんが主役を演じた青函の完成は、英仏海峡トンネルをはじめとする世界中のトンネルプロジェクトを触発した。86 年に英仏海峡が決まった後、次はどこだと興銀の会議室で持田さんからお話をうかがったことを覚えている。スエーデンーデンマークの渡り鳥計画、スペインーモロッコのジブラルタル海峡トンネル、日韓トンネルなどなどであったか。その後も、モロッコのハッサン国王に呼ばれてジブラルタル、青函、英仏の話をしにカサブランカを訪問されたことを何度もうかがったし、昨年 6 月の学会の総会のときにも、日韓トンネルをプロジェクトファイナンスに仕立てるには誰に相談したらよいですかねなどと話をしたが、これが最後であった。

持田さんは、「マクロプロジェクトを実現した人」であり、「マクロプロジェクトの完成請負人」であり、「マクロプロジェクトの種まく人」である。こんな人は世界中のマクロエンジニアリング学会をみわたしてもどこにもいない。それも考えてみれば当然である。マクロエンジニアリング学が発祥した 1970 年代に唱えられていたいくつかの「未来のマクロプロジェクト」のなかで実現したものといえば英仏海峡トンネルぐらいしかないのだから。日本マクロエンジニアリング学会が「マクロプロジェクトを実現した人」を会長に戴いたことを誇りに思う。